

朗読詩

はるかな時を越え

―江戸から来たひと、井戸平左衛門―

洲浜昌三 作

時は

音もなく

すべてを消していく

絶え間ない時の流れは

私のことも 私が愛した人達のことも

跡形もなく消してしまっただろう

冷酷な時が消せないもの

非情な時が残していくもの

それは何か

はるかな時を越え

遠い時の彼方から蘇ってくるもの

それは何か

何百年の時を越え

ある日 ふと、心と心を結ぶもの

それは何か

今を去る二百数十年前

享保十六年九月

あなたは 石見銀山の代官に任命され

住み慣れた江戸を発ち 石見の大森へ向かった

笠岡から府中、上下、三次と銀山街道を下り

長くて険しい赤名峠を越え

石見の地へ入った時

あなたの目に写ったのは何だっただろう

目の前に迫ってくる山また山

急斜面に重なる狭い畑や田んぼ

千茅ちがやのように突っ立ち 風に揺れる稲の穂

六十歳の高齢で

大岡越前に推挙され 徳川吉宗の命を受け

大森銀山領の代官としてはるばる江戸からやって来た人

井戸平左衛門正明

あなたは二十一歳で井戸家の養子になり

その年に養父を失い 妻に先立たれて再婚

三十年間 勘定方の平役人を黙々と勤め

高齢の身体を駕籠に揺られて大森に着いたとき

あなたは 動けないほど衰弱していた

十一月初旬 大森に着いたばかりのあなたは
何故か 二十日後に江戸へ帰っていった

病弱だった息子の敬武のりたけが危篤状態だったからか
農村を視察して その惨状を幕府に報告するためだったのか
今になってはその訳は分からない

次の年 五月二十六日 一人息子の敬武のりたけは死亡し

新たに養子を迎えて井戸家の跡継ぎを決めたあなたは
再び江戸を発って大森へ向かった

三十日もかかる長い道のりを駕籠に揺られて

身体は弱り 七月の終わりに大森へ着くと

大田村の医師 中島見龍の治療を受けた

病を抑え あなたは村々を巡視して被害を調べた

石見の直轄地の村々 岡山の上や笠岡 四国の伊予

あなたの眼の前に 見たこともない風景が広がった

雲のように飛んで来たウンカに食い荒らされた稲

空は晴れず、毎日霧のような雨に閉ざされた大地

草の根を食べ木の根を探して山野を歩き回る人たち

江戸三大飢饉の一つ 享保の大飢饉

「九十六万九千人が餓死した」

と「徳川実記」は記録している

「津和野領内の餓死者一万一千四百四十一人」

と「島根県史年表」にある

「食べ物に困っている人三十二万四千、
餓死者八千六百四十四人」

と広島藩の記録にある

ところが 石見銀山領について

「徳川実記」はこう記録している

「夫ふ食じき行き届とどき餓死人 これ無なき由」

あなたが石見へ来る前から始まっていた大飢饉

村々で農民たちの餓死寸前状態がつづき

あなたは江戸へその惨状を報告した

しかし 幕府の指示を待てば二ヶ月ちかくかかる

あなたは村々にこんな高札を立てた

「米や金銀にゆとりのある者は

困っている者に恵み貸し渡ししてほしい

貧しい者を思いやって 食べ物節約し

余った分をわけるような心遣いをしてほしい」

更に代官としてあなたは こんなことを行った

「種粃や米の無利子貸し付け」

「年貢の減免免除」

「百日間 一日男子米五合 女子一合の貸し付け」

「買占め 売り惜しみの禁止」

川本町 光永寺に残る文書には

こうしたためである
「人民一同大喜せしなり」

三十年間幕府の勘定方の役人として

全国の直轄地を巡検して回ったあなたは

「さつまいも」のことを知っていたに違いない

幕府の添書状を付けて

薩摩の国から「さつまいも」を取り寄せ

百石につき八個の芋を分け与えて植えさせたのだろう

見たこともなく 育て方も知らず

植えた時期も季節はずれの七月半ば

ほとんどの芋が腐ってしまった

ところが 偶然にも

福光村の松浦屋与兵衛が植えた芋が育って冬を越し

春に芽を吹いたという

享保十八年一月 各地を歩き回ったあなたは

休養を取るために温泉津の温泉へ出かけた

ところが体の具合が悪くなり しばらく宿え泊まった

しかし二月になるとまた石見の村々の巡検に出かけた

津茂 日原 中木屋 石ケ谷 十天堂 畑ヶ迫…

享保十八年四月

あなたは病におかされた体を駕籠に乗せ

二年しかいなかった大森の代官所を後にして

兼務していた笠岡の代官所へ旅立って行った

その道中で 村々の農民や子どもたちが

涙を流し 手を合わせて見送ったにちがいない

四月五日 大森の出張陣屋だった上下陣屋へ到着して

様々な働きをした伊達金三郎に幕府の命令書を渡したあと

笠岡の代官所へ着いてから数日たった四月十六日

あなたは再び身体の不調を訴えた

すわ一大事 とばかり石見 備前 備後から

名医が呼び寄せられた…その数十三名

石見から呼ばれ 馳せ参じたのは

邑智郡川本村築瀬の名医、錦織玄秀

さて 彼が書き残した手記を要約してみよう

「ああ、不運なるかな平左衛門殿、病根を知る医者

一人もなし。予はこれを知るといえども既に遅し。

後から来た、仙庵・見伯は病人を治すと受けあい、

酒・肴を食し…平左衛門が生死の境にある

というのに、遊女と戯れ、嘘とずるがしこきは、

あさましき世界かな」

あなたの死因は その時の診察の記録から

心臓性喘息と推測されるという

肝臓も異常に腫れていた と診断記録にある

一ヶ月ばかり過ぎた五月二十六日

あなたは 永遠に帰らぬ人となった

奇しくもその日はあなたの息子、敬武のりたけの命日であった

あなたは手足がむくみ激しい咳や悪寒と闘いながら

養子に迎えた正武に長い遺言状を書き残した

忠義に励み 武道の稽古を怠らず 学問に励み

先祖の供養を忘れず など心得を書いた遺言書だった

その一節にこんな言葉がある

「第一の心掛は 慈悲を専らにし 人を見捨てず
家来には情けをかけ 一時の腹立ちで人の命を取る
ようなことをしてはならない」

あなたは 幕府の米倉を無断で開けたので

その責任を取って笠岡の陣屋で

潔ことごとく自ら切腹した とも言われている

激しい咳と悪寒と下痢に襲われ

病気で亡くなった とも言われている

自ら責任を取って切腹したが

お家断絶を恐れた周りの者たちが

病死だったと幕府に届け出た とも伝えられている

今も貧しく 潔ことごとく

反骨心旺盛な石見の庶民には

切腹説が ピッタイくるのですが

本当はどうだったのですか

井戸平左衛門正明殿

あなたは知っていますか

五十年後 天明の大飢饉

百年後 天保の大飢饉

日照りに強く 砂浜でも育ち

年貢がかからない「さつまいも」は

村々に広がり 隠岐に広がり 鳥取に広がり

山口・広島・岡山に広がり

多くの人たちの命が救われたことを

井戸平左衛門正明殿

あなたは知っていますか

人々は あなたへ感謝し

あなたの徳を讃え

後の世に伝えていくために

つぎつぎと「頌徳碑」を建て

いまでも あちこちの町や村に残るその数

五百基以上

貧しい庶民の手で

こんなにも多くの頌徳碑を建ててもらった人が
世界中にどれだけいるでしょう

三百年のはるかな時を越え
いまも蘇ってくる あなたは

「石見の父」のように
なつかしい

注・この詩は、1995年(平成7年)大田市の担当者から依頼されて
「笠岡・大田市友好都市縁組締結5周年」記念行事「夢のかけはしコンサ
ート」のために書いたものです。

大田ウインドオーケストラのために妹尾哲巳氏が作曲され、詩は、当時
山陰中央テレビのアナウンサーだった芝田瞳子(現、松岡、大田高校演劇
部在籍、現在神戸市在住)さんが担当して朗読しました。

オーケストラと詩の朗読という画期的な試みでしたが、いろいろ探して
みましたが、録音や楽譜は見当たりませんでした。

大田市民会館では、大田小学校ファンファールバンド、マイシティコール
“おおだ”、大田混声合唱団、大田ウインドオーケストラ、笠岡消防音楽隊が
発表。大勢の人が耳を傾けました。当時の市長は熊谷國彦氏です。

その後、この詩は「朗読を楽しむ」や様々な場所で朗読発表しましたが、

そのたびに手を入れました。

今回のこの詩は、「山陰文藝」58号に掲載した作品に、少し手を入れて
います。

過去の歴史的なことは、新たな発見があったり、間違いがあったりするの
で、難しいことが多々あります。今回の詩には、平左衛門の命を受けて伊達
金三郎が薩摩から芋を密かに持ち帰ったことはカットしています。どう
やら、創作された可能性が高いからです。専門家に聞きましたが資料もな
いそうです。

全体敵に、歴史や脂漏に忠実に書いています。とはいえ、「徳川実紀」の
記録も確証がないからです。歴史ものは扱いが難しいので、完全にフィ
クションとして書けばいいのですが、それは避けました。

一人で朗読するのもいいですし、数人で群読するのも面白いと思いま
す。劇研「空」の発表では、4人で、映像も投影しながら発表しました。

(20240526 洲浜昌三記)